

「有限性の後で・偶然性の必然性についての試論 カントン・メイヤス-2006」をまとめる

大阪哲学同好会 横山 2018.9.16

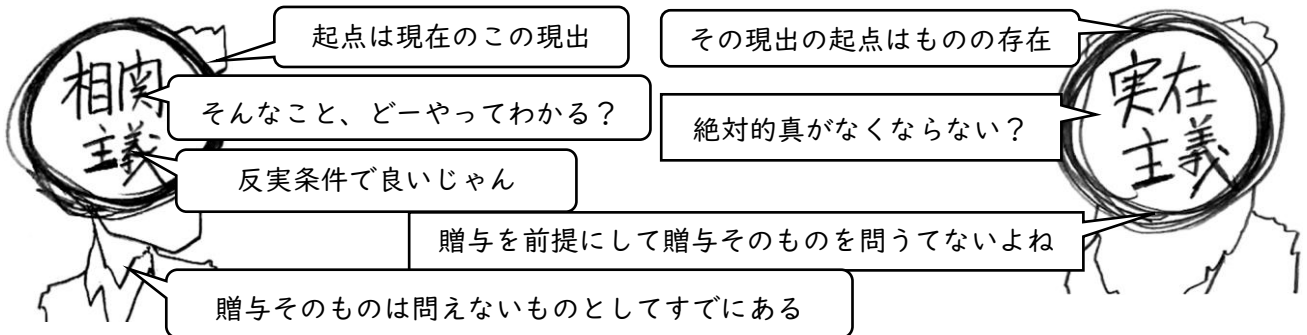
●第1章 祖先以前性 (問題)

【祖先以前の言明】人間の出現以前の現実について語る言明。その真偽や有意味性をどう考えるか

(形而上学は神の視点によって永遠を語れてしまう→祖先以前言明を問えない)

超越論的視点：即自を実体化させない
⇒ **相関主義**
(即自へのアクセス可能性が無い)

實在論的視点：即自を実体化する
⇒ **思弁主義**
(即自へのアクセス可能性がある)



超越論的主観の例示(世界は私の世界)と超越論的主観の例化(私は私の世界)の両立が主観(或いは世界)の成立条件だよ



課題：非相関や絶対へのアクセス可能性を探ろう

●第2章 形而上学・信仰主義・思弁(有意味な信念って?)

◎デカルトの証明・神は無限に完全ゆえに存在する。

- (形而上学)
- ・神は完全ゆえに存在の延長性を欺いてたとしたら矛盾
 - ・だから、絶対的な存在(物自体)はある

(反論)・でも、それもすべて我々にとってのことじゃん(相関的循環)

- ・矛盾律は存在が想定されているものにしか使えない
- ・だから、必然的實在は独断になる・・・ダメ

◎理由律から導出できないか

- ・理由律：すべての存在状態は必然的理由がある
→無限遡及 or 自身を理由づけられる絶対的理由が必要
- ∴ 相関主義から、理由律の正当性に辿り着けない・・・ダメ

◎相関性の意味から考えてみよう

- 【偶然性】可能世界の想定で別様の可能性を認め、どちらに転んでもおかしくなかったこと。
- 【必然性】可能世界の想定で別様の可能性を認めても、別様に転ぶことがあり得ないこと。
- 【絶対性】可能世界の想定以前の根拠性・超越的理由によってすでに実現されていること。
- 【事実性】可能世界の想定以前に事実であることをそのまま受け入れること。非理由性・無根拠性

【**相関項の第1次性**】主体と存在者の相互関係が存在の第一の基盤となること。

・・・定義から目撃者と独立の存在に辿り着くのは無理。

【**相関項の事実性**】主体と存在者との相関の事実を受け入れ、その相関性を絶対化すること。

・事実性の視点で世界を見れば、あらゆる法則は前景化し法則性を消失する→「非理由」

→イデオロギー主張（存在者の必然があるとする形而上学的主張）ができなくなる。

・ただし、「イデオロギー主張の否定」≠「即自の存在の可能性の否定」

・**事実性が糸口になりそう** 相関主義は、1次性を問うだけで満足してたのじゃないか

「事実性は、この世界のただ中に到達不可能な《全き他者》の（括弧付きの）「可能性」を把握させる」

仮説的可能性において、即自にコミットするあらゆる仮説が合法と言えるものになる。

「形而上学的独断的信仰」のような独断でない「思考による信心」を求めたい

●第3章 事実論性の原理（即自の条件って何？）

◎思弁主義じゃないとダメか？ 5者の立場を比較

- ① **【キリスト教的独断論】**我々は死後にも存在するとする。「即自＝神」の立場
- ② **【無神論的独断論】**死によって何もない状態になるとする。
- ③ **【相関主義】**主体と存在の相互関係が存在を意味づける。私の死後に関する知（主体不在の知）は矛盾でしかないとする。〈即自〉の存在を語るができないことはもちろん、〈即自〉の非存在を語ることもできない。（隣室に机について、今の部屋で得られる情報だけが有意味で「隣室に行ったら分かる視点」はあるとか無いとか言えないとする。）
【弱い相関主義】主体と独立の即自の存在と即自に関する思考可能性を認める（カント主義）。
【強い相関主義】即自も即自の思考可能性もナンセンスとして認めない（ウイトゲンシュタイン・ハイデガー）
- ④ **【主観主義】**形而上学的主観主義。現にある主観のみを絶対だとする。主体と独立の即自は存在しないと切り切ることができる。死後の世界も、神も、無も、即自も存在せず、完全に思考不可能。〈即自〉は、もしあるとすればそれは〈私たちのとっての即自〉でしかない。（隣室の机について「隣室での視点」は端的に無いとする。）
- ⑤ **【思弁主義】**絶対的なものにアクセス可能だとする。理由律から解放され「別様である可能性」が開かれているとする。だからこそ他者の視点があり得るとする。（隣室の机について「隣室での視点」があり得るとし、実際に隣室に行けば分かるかもしれないとする。）

この思弁的視点がなければ自分の生を生きることができない…？

◎非理由律が絶対であるわけ

- ・ 物理的時間：あらゆるものが生滅変化する時間。理由があり得る
- ・ 前提としての時間：あらゆる法則が失効する。＝（ここに、この今現在がある時間）
 - ・ ・ ・理由があり得ない。

【**儚さ・見かけの偶然性**】全知の神は知ってるけど人間は知り得ないという偶然

【**真の偶然性**】全知の神も知らない偶然。＝非理由律・事実性としての偶然性

◎デカルトのカオスの第一絶対者

- ・ 神は絶対ゆえに矛盾まで成立させる。

「何も不可能ではない。思考不可能なものも一切無い」→ハイパーカオス

◎数学的第二絶対者

カオスでの即自を非理由の下で考えると、

- ・ 偶然性が必然的でありゆえに永遠だ。
- ・ 偶然性のみが必然だ。

⇒ カオスは必然的絶対者だけは生み出さない
ということだけは必然的に知っている

◎「物自体の無矛盾」の証明

前提：①必然的な存在者は不可能。②存在者の偶然性は必然。

証明：・もし存在者が矛盾している場合、その矛盾は必然でなければならない。

- ・ しかし、前提より必然的存在者は絶対的に不可能。
- ・ ゆえに、矛盾も絶対的に不可能。

結論：矛盾した存在者は絶対的に不可能である。

【非理由律の弱い解釈】

もし何かが存在したらそれは必然的に偶然。

【非理由律の強い解釈】

存在するものは必然的に偶然。かつ、それが存在しなければならない。

◎「即自的なものが存在することは絶対的必然である」の証明

証明の考え方：ライプニッツの問い「なぜ何かがあるのであって無いではないのか」と同じ問い。

仮定) 弱い解釈だけで強い解釈がないと仮定する。

- ① ∴ 事実として既にして疑い得ない世界があることが偶然。
- ② そのためには世界が無い可能世界があるという想定が必要…矛盾

結論) 強い解釈でなければならない

【**事実論性**】 事実性の必然性。偶然性の必然性。事実性が非事実であり、事実性が必然であること。

【**事実性の非二重性**】 事実性を事実性それ自体に帰属させることの不可能性。それによって事実性の絶対性を疑うことができなくなるってこと。

【**事実論性の原理**】 非理由律。必然的偶然性の原理。事物の事実性それ自体は事物の一つとして思考され得ないとする。存在自体は世界内の存在でないものとしてすでに常に叶えられてしまっているが、そこではあらゆる存在者が偶然の存在だってこと。そして、その偶然性が必然だってこと。

●第4章 ヒュームの問題（偶然なのになぜ安定？）

【ヒュームの問題】経験科学は今日と同様に明日も可能であることを証明できるか

◎デカルトの考え・形而上学的超越的回答（神の定義による証明）

◎ヒューム自身の考え

- (a)理由律や因果律の証明が不可能
- (b)習慣と傾向性によって因果律を確信するほかない

◎カントの考え・頻度の帰結：仮に自然の斉一性の原理がなければ状況が頻繁に変わらないことは極めてあり得ない。しかし、現実の状況では極めて安定している。だから、世界には自然の斉一性があるとと言える。

【クリナメン】エピクロス考案の、物質生成の運動。空間の極小単位から単位への飛躍を指す。偶然性を担保し非決定論的な自然法則を導く。…（でも、偶然性を許すけど法則自体は必然）

【hasard アザー 偶然の巡り合せ】その状況を実現させる諸法則が前もって存在することを想定した上でのランダムなチャンス

【法則の contingency コンタジونس 偶然性】アザーによって出来事が起こることを可能にする条件自体に影響を与える偶然性。そのため、アザーのカテゴリーに包摂することができない。

◎メイヤースーの考え・「頻度の帰結」論駁

①頻度の帰結は思考可能と経験可能の比における確率論であること。

$\langle \text{世界に実際に経験できるものとしてあり得るもの} \rangle \div \langle \text{無矛盾で思考可能なものの全体} \rangle$
= 「現実を経験できる状況が起り得る《頻度》」

②濃度の最大限は開かれていること。←カントールパラドクス（集合の集合はあり得ない）

③思考可能の全体は法則の偶然性に関わるので濃度が開かれ、値を持ち得ないこと。

究極のコンタジونسはどこまでも確保され得ないから、この分母が無限であったり非確定であったりするだけでなく、それが某かの値であることがあり得ない。

④よって、頻度の帰結は確率論として成立しないこと

- ◎究極のコンタジونسレベルの法則はあり得ない。
- ◎でも、究極の必然性が否定されたアザーレベルの仮の法則はあり得る

⑤だから、頻度の帰結を否定しても、世界はとりあえず安定していられる

●第5章 プトレマイオスの逆襲（即自をどうやって捉える？）

○問1：隔時的言明がどうやって有意味になり得るのか

・隔時性の問題：主体より以前または以後の事物に関わる言明に関する問題

それは事実問題でなく権利問題。

（言明が有意味かどうかではなく、有意味であるとはどういうことかの問題）

どうやって⇒数学化によって

【ガリレイ主義】自然の数学化。自然の全てが数学的処理可能なものだとできるようにした。



【ガリレイ転回】ガリレイ主義によって人間から分離可能な世界が開陳された。

【コペルニクス転回】「地球中心=人間中心」から脱中心化への転換。

・主体と独立な世界記述が可能だという前提になる。

【近代科学の根本原理】実験と仮説がともにそれ自体の合理性を担保できること。

「我々の思考・記述の仕方」によってだが「我々の目撃とは独立な内容」を語ることができる

【デカルトテーゼ】数学的に思考可能なものは絶対的に可能。(実在することが可能である)

○問2：相関主義はどこで間違ったのか

【カントのコペルニクス転回=プロトレマイオス的反転】カント

トの超越論的観念論の転回は、コペルニクス転回の「脱中心化」を「主体中心化」にしてしまった。

・隔時的言明ではある事物が思考以前に思考と独立に既に生じていたことが思考可能 ————ということが世界記述の前提であることに相関主義は同意しない(でもそれは「私にとっての私の思考以前」でしかないはずだ)



○相関主義にとって隔時性とは、主体から過去に向かって為される「後方投射」でしかない。



○科学的時制とは「現出のパラドクス」を引き受けて思弁的時間制に挑戦することそのもの

【現出のパラドクス】あらゆる実験に先立つ世界についての経験的認識はいかに可能か。

○《相関主義の根源の幻影》

幻1：数学的認識でクオリアが失われる (↔ 数学的認識でクオリアが失われるとは限らない)

幻2：あらゆる知はアプリオリではありえない (↔ 科学的仮説はアプリオリな知を探し得る)

幻3：思弁的形而上学は違法 (↔ 思弁的形而上学が合法であり得る)

○「カントの問題」自然の物理科学化はどうすれば可能か？

①隔時性をめぐる絶対化—存在的絶対化(可能的な実在に関する絶対化の問題)

・目撃者不在の対象でも仮説的法則によってその実在性を問うことができる。

②カントールの《非全体》の絶対化—存在論的絶対化(可能性の構造自体に関する絶対化の問題)

・全体の思考可能性を認めない理論だけが、逆に、無条件で必然となるような「究極の定理」を思考することを許し得る。

●まとめ

【メイヤースーの思弁的唯物論】我々とは独立に必然的に偶然的な存在が存在する。かつ、あらゆる存在は主観的な本性を有する理由を持たず、それゆえ、数学的に思考可能なものとして存在し得る

(最後に横山の疑問)

○他者のクオリアの問題と隔時性の問題の関係。

○私の言語がどこまで私と独立な記述を許し得るか。

○メイヤースーは集合論を用いて思弁主義の優位を説いたが、その根拠となった超限数の果てこそが「生の哲学」における「私にとって」だと言えてしまわないか。